

# 「学び」のチカラ。

全学共通教育科目(教養教育)講師と受講生に聞きました!

## 広報・PR論入門における「学び」とは、コミュニケーションである。

岐大発。

# 「学び」とは

# 〇〇である。

「学び」とは〇〇である。  
 大学で身につけるべき教養はなにか。大学における「学び」とはなにか。  
 個々の人生が多様であるように、そこに究極の答えはないのだから。  
 それならば、各々違ったフィールドで活動する人達に同じ質問を投げかけてみよう。  
 さまざまな人の考え方を聞くことができれば  
 「学び」が今よりもっと魅力的に見えるかもしれない。  
 あなたのフィールドにおいて、「学び」とはなんですか。



岐阜大学地域科学部准教授 野原 仁

この講義の第1の特徴は、1 グループ6名の学生によるグループワークです。つまり、それぞれのグループが、本学の広報に関わるテーマを自分たちで設定し、そのテーマに基づいて、実際に作業を行うのです。具体的には、あるグループはオンラインキャンペーンの際に高校生に配布するために、柳戸キャンパスのマップを制作し、また別のグループは、本学のブランド価値を高めるための広報素材を探しました。このグループワークでは、当然ですが、学生同士がきちんとコミュニケーションを図らないと、作業は何も進みません。そのため、先述したテーマの設定だけでなく、具体的な企画内容・作業スケジュール・役割分担などのさまざまな点について、学生たちは真剣に議論を重ね、そして決定事項に従って、協力して作業を行いま

した。  
 さらに、各グループによるプレゼンテーションも2回実施しましたが、その内容や方法についても、学生たちに議論・決定してもらいました。その際に、「プレゼンテーションとは、一方的に情報を伝達するのではなく、聞き手に自分たちの意図する内容をよりわかりやすく理解してもらうことが重要であり、コミュニケーションのひとつのかたちである」ことをアドバイスし、学生たちもこのことをしっかりと理解して、プレゼンテーションを行ってくれたと思います(その意味では、グループワーク以外の通常の講義も、講師である私たちが一方的に教えるのではなく、学生たちの表情や態度を見ながら進める、という意味では、常に講師と学生とはコミュニケーションをとっていたと言えます)。

第2の特徴は、「自己評価シート」を用いて、毎回の講義で「具体的に、どのような知識や能力を、どの程度身につけることができたのか」を、各学生に自分自身で評価してもらうことです。コミュニケーション論では、複数の人間によるコミュニケーションだけでなく、このように自分自身を省みることを「イントラ・パーソナル・コミュニケーション」と呼び、コミュニケーションの「形態」として扱っています。したがって、この自己評価も「自分自身との対話(＝コミュニケーション)」なのです。  
 以上のように、この講義での「学び」とは、他者および自己とのコミュニケーションであり、さらには、このコミュニケーションを通して、「主体的に」学ぶことの重要性を認識することだと言えるでしょう。

## 「広報・PR論入門」とは...

全学共通教育科目(教養教育)である「広報・PR論入門」では、広報・PRおよびブランドに関する基礎理論を学ぶとともに、企業や自治体の広報担当者を講師に招き、現代社会におけるブランド力向上のための実践例をもとに、より深い知識を身につけるための講義です。岐阜大学をモデルとして、具体的な実践方法の立案を行うほか、グループディスカッションによるワークスタイルを通じ、企画力・プレゼンテーション力・コミュニケーション力・行動力を養うことができる内容となっています。

## 広報・PR論入門における「学び」とは、「伝える力」である。



地域科学部 4年生 田中 友梨 さん 地域科学部 4年生 鯨岡 真由 さん

就職活動では、自己PRやプレゼンテーションなど、よく「伝える力」を試されますが、私たち学生はこの「伝える力」の根本を見つめる機会に恵まれていると言えるでしょうか。  
 答えは「ノー」です。  
 通常の講義は、教授が情報を発信し、学生がその情報を受け取るような一方的なやり取りが目立ちます。しかし、本講義では広報の基礎知識の聴講はもちろん、現職で広報に携わっている方の講話を聴く機会があり、また、「学生が自ら計画を立て、情報を収集し、聴講で学んだことをベースに、プレゼンテーションを行う実践」が盛り込まれています。  
 ただ、事実をまとめ、そのまま発信するのではなく、情報の受け手のニーズを考慮することで、より有益な情報を発信する術を身につけました。  
 「伝える力」とは、自らの視点だけでなく、受け手の視点を併せ持つて初めて達成されるものだと言われました。

## 広報・PR論入門における「学び」とは、失敗からも得られるものである。



工学部応用情報学科 1年生 田尻 裕貴 さん 地域科学部 1年生 篠原 亜梨朱 さん 地域科学部 1年生 天野 弘恵 さん

岐阜大学をいろんな方々に知っていただくために、岐阜大学の魅力のひとつとして大学の地下水を見つけ出し、その地下水の魅力をどうやったら相手に伝えることができるか自分たちで考え、実践していききました。  
 いざ調査を始めてみると、大学では高校までとは違い、課題その調査方法まですべて自分たちで考え、実行しなければならなく、大学の地下水をほかの水との差別化を図るためにはどういったアプローチを取ればいいのか、まずはそこからでした。  
 思うような結果は得られませんでした。失敗があるからこそ何がいけなかったのか原因を突き止めることができ、次に繋げていくことが出来るということ、また、結果ではなくその過程が重要であると実感しました。

部・サークルで活動する学生に聞きました！

インターンシップ経験者に聞きました！

剣道における「学び」とは、人間形成である。



教育学部保健体育講座 3年生 野々村 崇 さん

「剣道の理念」において「剣道は剣の理法の修練における人間形成の道である」と示されています。私はこれまでの厳しい稽古を乗り越えて行く中で肉体的、技能的に成長すると共に、試合などでは単に勝った、敗けたという勝敗だけではなく、相手を思いやる気持ちや礼儀作法を大切にすると言った人格的にも成長することができました。剣道の上達はこの身体育成と人格の形成の両面が鍛わってはじめて上達できるものであると思います。またこの両面から人間形成できるものでもありません。私のこれからの剣道人生ではよりこれらのことを鍛え続け日々人間形成の道を歩んでいきたいと思っています。

インターンシップにおける「学び」とは、体感する社会人の自覚である。



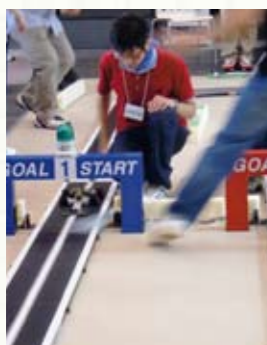
教育学部理科教育講座物理学専攻 2年生 伊藤 宏紀 さん

今回、私のインターンシップを引き受けて頂いた江南工機さんは、機械の組み立て、研磨、修理といったことを中心に行う機器器具の製造工場です。私は一週間の短い体験期間の中で、社会人として働く、変えられるました。職員の方々の働く姿を見て一番感じたことは、仕事に対するプロ意識。体験初日、工場の方にこんな話をさせて頂きました。「私たちが作った製品は商品になりお客様の手が届く。その過程の中には必ずお互い信頼関係が伴います。ここに頼めば大丈夫だと言われるものを作るかです。」職員の皆さんの姿にはこの言葉通りの意識が感じられ、職場内には常に緊張感がありました。私の今までの生活では成功もミスも全てが自分に還元されてきました。しかし、社会人はそうはいかない。自分のミスは会社、お客様が受けることになる。リアルな現場を感じることで初めてこの感覚はわかると思います。インターンシップはプロのプライドと責任を肌で感じられる機会と言えるでしょう。

ロボコンサークルにおける「学び」とは、経験によって裏付けされるモノである。



工学部電気電子工学科 3年生 清水 直哉 さん



大学での講義での学びとサークルで学ぶことは何が違うのだろうか？ そう考えた時に、一番の違いは実際にやって、試してみる事ではないだろうか。講義で学んだことや日々考えている事を実際に試すことが出来る場所がロボコンサークルだと考えている。ロボコンは自分たちで作ったロボットが競技をする。ロボットはメンバーの努力の結晶である。しかし、そこに至るまでは数々の、様々な問題が起こる。それをアイデアを出し合い、日々学んだ事を駆使し解決する。決してそれらの問題は簡単に解決できるようなものではなく、常に正解があるとは限らない。そこでベストを尽くす事こそが「経験」であり、今までに学んできたことを「経験」によって裏付けることができる。これがロボコンサークルにとっての学びではないだろうか。

インターンシップにおける「学び」とは、新しい世界を知ることである。



応用生物科学部獣医学課程 5年生 安田 昇平 さん

私は将来、「町の獣医さんになり、犬・猫の診療に携わりたい」と思っています。しかし、インターンシップの場としたのは、犬・猫の病院ではなく、動物園でした。これは、将来見ることのできない動物園の世界をあえて見てみようと思ったからです。インターンシップを通じて、動物園動物ならではの診療の難しさ、動物の飼育や管理の難しさ、国内における動物園の立ち位置、動物園が行っている啓発活動など、今まで自分が知らなかった多くのことを学ぶことができました。したがって学びとは、新しいことを経験し、それを自らの力とし、自分を高めるための行為だと考えます。

